



Title	シャーマンの憑依行動(2) : 方法論
Author(s)	和田, 完
Citation	北海道大學教育學部紀要, 8, 94-100
Issue Date	1962-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28994
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_P94-100.pdf



シャーマンの憑依行動(2)

一 方 法 論 一

和田 完

目 次

第1章 研究対象となるいくつかの焦点

第2章 一試案としての役割理論の応用

参 考 文 献

第1章 研究対象となるいくつかの焦点

筆者は、先に発表した「シャーマンの憑依行動」¹⁾という論文の中で、ミシェル達 Mischel, W. et al とヤップ Yap, P. M. によって、最近行なわれた憑依現象に関する二つて研究を概説した。前者は、学習理論を応用し、¹⁹⁾ 後者は、新精神分析学の立場からこの現象を解釈した。両者に、かかる立場の相違はあったが、共に憑依行動が特定の社会環境によって影響されることを注目し、ミシェル達は、彼等の挙げた「憑依を永続するために必要な諸強化」が、トリニダット島に特有なものであることを言い忘れたかったし、ヤップも、論文の主要なテーマを香港とフランスとに於ける、憑依の症候像の差に置いている。²³⁾

筆者も、この一連の研究に、「シャーマンの憑依行動」というタイトルを与えている以上、いわゆるシャーマニズム世界に現れる憑依行動の研究を意味するのである。しかし、筆者の場合、シャーマニズム世界とは、一体どの地域を指すのかという困った問題に遭遇する。例えばフィンダイゼン Findeisen, H. を嘆かせた様な、常識的な意味で、シャーマンを、プリミティブな呪術者と解するなら、人間の住むありとあらゆる所を含まなければならぬ。⁴⁾ 或は、オールマルクス Ohlmarks, A. の様に、シャーマニズムを極北地域に限定されるものと考えれば、⁹⁾ 範囲はかなりせばまって来る。

もし、我々が、シャーマニズムという問題を、総括的に論ずるなら、何らかの形で、シャーマニズムを地理的に限定するという問題を避けることが出来ない。しかし今問題としようとする様なこと、つまり、ある文化がそこに住む人間に、いかなる効果を及ぼしているかに焦点

を合わせる時、必しも、その文化を存続させている地理的環境を正確に規定する必要がないのである。前述したヤップにしても、憑依の症候像が、香港と西欧(特にフランス)において、明瞭な差のあることを、それぞれの文化的(宗教的)背景の違が原因だと言っている。しかし、これらの憑依者の属している文化とは、何処に存在するのか地図の上で示すことは、厳密に言って不可能である。

このヤップの取り扱った研究を、仮にトールマン Tolman, E. C. の図式にあてはめて見ると、社会心理学に属することになる。即ち、社会心理学が扱う媒介変数(B)と、心理学が扱う独立変数(D)と媒介変数(E)の系列、即ち $B \rightarrow D \rightarrow E$ という系列を研究の対象としているのである。トールマンの言う様に、この $B \rightarrow D \rightarrow E$ という系列は、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow E \rightarrow F$ (A: 社会学における独立変数, C: 社会学における従属変数, F: 心理学における従属変数) という系列の短縮された形である。¹⁰⁾ この図式上の関係に示される様に、社会心理学においては、地理的布置といった社会学上の独立変数がある意味で無視し、文化(いたって曖昧な言葉だが)の様な媒介変数を出発点とすることが出来るのである。

筆者は、トールマンのこの図式にこだわるものではないが、当面の問題として、シャーマニズムの地理的な定位や、歴史的な発展過程を排除して、少なくともシャーマンと言われる人々に共有され、シャーマニズムと一括して概念化されるものが、彼等のセアンスで示す憑依行動に、いかなる効果を与えるかについて一つの関心を示すのである。

ここでいうシャーマニズムとは、正しく「イズム」としてのものである。即ち、シャーマン達が持っている共通したイデオロギーであり価値観である。ここで当然のことながら、シャーマン達に共通したシャーマニズムとは何か、という疑問が生まれる。だが、この間に答えるこ

とは甚困難である。今までにも、すぐれた総合的研究は少なくないが (Shirokogorov, S. M. Schmidt, P. W. Eliade, M. Findeisen, H. Schröder, D. 等といった名前だけを示しておこう) 何がシャーマニズムとして共通する世界観であるかの最終的解答は与えられてないと言って良い。従って、筆者は『シャーマンの憑依行動』という一連の研究の一つのレベルとして次のことを挙げる。

『シャーマニズムを規定するために、この問題に関連する各種の文献や資料から、共通する部分を抽出する』

ここで留意すべきことは、共通因子を抽出しても、その各因子の多くが、シャーマニズム以外の何らかの概念と重複するに違いないということである。同じ人間という種に属する以上、完全に特有な考え方は、それ程多くない筈だ。しかし、それらの因子がシャーマニズム世界観という全体を構成するのに缺くことの出来ないものである以上捨て去るべきではないのである。

上述の水準での研究は、所謂、比較文化研究法の一つと看做されるかも知れない。事実、そこで見出されたものは、シャーマニズム世界に住む典型的なシャーマンの媒介変数の一つと考えることが出来よう。しかし、このシャーマンというパーソナリティが、筆者の窮極的な問題ではない。これは、単にシャーマンの憑依行動なる行動に反映するという意味で問題となるのである。

そこで、筆者は、もう一つのアプローチの水準、即ち『シャーマンの憑依行動は、いかなるメカニズムによって発現するか』に焦点を合わせなければならない。

我々は、ある種の新奇な現象に対し、科学的な陳述を行なおうとする時、まず、科学的な方法で、その現象に関する出来るだけ多くのデータを集めるのが普通である。しかしポワソナル Poincaré, H. のいう様に、科学は単なる事実の集積ではなく、そのデータに解釈がなされなければ大した意味がない¹¹⁾。この解釈過程が「仮説」の設定であり、その実験的検証である。

だが、この帰納的方法の優先は、かなり可塑性を有しており、特に、生活体の行動を扱う心理学では、ハル Hull, C. の仮説演繹法といった手段を缺かせないようだ。即ち、生活体の行動から、観察しえる事実だけを蒐集する古典的行動主義者のやり口では、生活体の行動のごく一部しか処理出来ないことは火を見るよりも炳である。しかも、この行動の実験は、同じ様な装置を使いながら、ソーンダイクとガスリーの猫の実験で、全く相反する結果が出ていることからわかる様に、極めて統制がむずかしく、実験データの客観性ということ自体、他の自然科学程信憑性がないのである。従って、この様な

客観的データの不足は、ある程度、先験的に立てられた仮説から出発し、現象の発現するプロセスを、演繹的に観察や実験や他の正当な手続きで検証することが要請されるのである。

こうした仮説の一つとして、現代の行動主義者が好んで用いる、トールマンの媒介変数がある。既に、屢々用いて来たこの概念は、元来、ウッドワース Woodworth, R. S. が、一つの明白な事実、環境と生活体の相互作用から行動が発現するという事を図式的に示す為、S—R 公式の間に、生活体の頭文字 O を挿入したことにはじまった (cf. 22)。確かに、生活体の反応は、環境刺激以上のものである。この間のギャップを媒介諸変数をもってうづめ、その変数間の関係を、出来るだけ科学的言語で記述し、実験的検証に堪えさせるということは、心理学に大きな進歩をもたらすであろう。

上述の様に、心理学に留らず、あらゆる科学は、観察しえない事実¹²⁾に仮説の使用が許され、その仮説が実証的に論破されるまで、内在的真理を保つと看做されている。この事は、完全に仮説から出発しても、もし科学的な実証に堪えたなら、真理であるということと同義である。今、筆者の当面の問題に対して特にこのことは重要である。即ち、シャーマンの憑依行動に関する経験的資料が、あまりにも少ないという事実がある。筆者の手元のシャーマンの憑依に関する観察資料は、科学的な解釈 (仮説) を行なえるだけ存在しているか否か疑問である。

しかし、この制約にも拘らず、もし実証にさらずなら憑依行動の発現過程の仮説は、意味を持つのである。

筆者は、こうした論理的な正当性を主張するけれども、事実、無から仮説を引き出す程大胆でない。恐らくある現象の発現の因果関係を解釈する時、そのプロセスが分からなくても、何かの類似の現象で一応解釈して見る論法が有効である。ネズミが迷路の曲角で、首を左右に振ったら、思案投首を想像し、高い走路をよちよち歩いたら、ネズミの不安を考える。筆者も、シャーマンの憑依行動の仮説を立てる為、他の類似現象との比較を手がかりとしよう。

シャーマンの憑依行動の類似現象は、大体次の三つに分けられる。第1、精神病理学的現象としての憑依行動 (以下ヤップにならって憑依症候群と呼ぼう)。第2、催眠現象。第3、他の未開集団における憑依行動。

第1 憑依症候群 (注1)

旧くから、シャーマンの憑依行動に関しては、この憑依症候群という病的現象と同一視する研究者が居るが、

筆者は、この見解に賛同出来ない (cf・19)。しかし、これが大抵、神経症と看做されている以上、この症候群は、その障害発生の過程を心理学的に辿ることが出来る性質のものである。従って、そこに用いられる心理学は、シャーマンの憑依行動を説明する心理学と単一のものである (筈だ)。両者の現象的な類似は、両現象の発生機転の類似を暗示する。又、注意すべきことは、この憑依症候群を伴わない他の神経症に関する研究である。シアズとコーエン Sears, R.R. & Cohen, L.H. も指適する様に、ヒステリカルな現象の生理学的見地からの研究が軽視される傾向があったが、徐々に盛んになっているこの種の研究に、憑依行動に伴う痛覚脱出や強硬症や健忘などの徴候の理解をあおぐ必要があろう。筆者は、憑依行動の説明に、何らかの心理学上の法則を適用する時、徹底した還元主義の立場を取る気持は全然ないが、ある種の徴候の理解に生理学的な水準での説明の必要性を認めている。

第2 催眠現象

催眠現象とプリミティブな社会における憑依行動との類似性は、かなり旧くから、人類学者達に知られていた。両者の関係を、非常に総括的に論じたのはシュトル Stoll, O. であろう。彼は、『民族心理学における暗示と催眠術』¹⁷⁾の中で、民族心理学で取り扱われる種々の憑依現象を、催眠との関係において論じ、特に、シベリアのシャーマンに関しては、パラスとグメリンのシベリア旅行の記録を引き、シャーマンの憑依現象を自己催眠状態として記載している。

この様に、未開社会に見られる種々の憑依を、催眠と全く同一の現象として論ずることに疑問がないわけではないが、筆者は、両者を連続する次元にあり、しかも重畳すると論ずる時、多くの点で正当と看做している。

ちなみに、シャルコー Charcot, J. M. は、宗教的忘我をヒステリー現象とし、同時に催眠現象もヒステリーの症状と考えていた。即ち、忘我 (憑依の深化した形と考えて) と催眠が、ヒステリーという一つの概念で包括されているのである。

シャルコーの様に、ヒステリーと催眠とを完全に同一視する見解は、ヒステリーと催眠との相関がはなはだ怪しいので、現在あまり支持されてない (cf・3, 8)。しかし、催眠がヒステリーの症状と言えないとは言え、両現象に全く関連性がないと言えないだろう。特に、エディップス・コンプレックスが、実験者に投射されると考える精神分析学派の見解は、催眠とヒステリーの類似性が強調され、事実、無視出来ない臨床的結果が示されてい

る (cf・15)。我々は、ヒステリー性意識涵濁や催眠や憑依現象が、睡眠へ移項することから見ても、それらの間に、何らかの密接な関連があることを推測出来る。

後述することだが、サービン Sarlin, T. R. は、この様な各現象の類似性から、被催眠者の行動、ヒステリー現象、忘我や神秘的体験等が、役割実現という社会行動の一般理論の中で統括的に論ずることが出来、しかも、それらが皆、かなり似た程度で、生活体の関与が行われると述べた。¹⁴⁾

筆者は、催眠行動のメカニズムと憑依行動のメカニズムの類似性に関して、推測的な陳述しか行なえない段階だが、現象的な類似性に対しては、確言することが出来る。

例えば、憑依行動には、多く夕刻の薄暗い静かな時が選ばれ、目をつむるなりして安静状態を保つことが先行する。主として太鼓をたたくことによって注意が集中される。トランスの深さに個人差はかなりあるが、所謂分離状態を示す。セアンスの他の参加者の質問に反応を示す。後催眠健忘様の健忘を示す。

これらの事実だけでも、入催眠を自分で統制する自己催眠状態と、著しい類似を持つと言わねばならないが、この記述を更に補足する意味で、最近発表された、ハイチ島 (イスパニョラ島) におけるブードゥー教の集団憑依を、催眠現象と関連させて論じたバウアズ Bowers, M. の報告に触れておこう。²⁾

衆知の様に、ブードゥー教は、黒人に流布する神秘的儀式である。彼女は、この儀式をつぶさに観察し、太鼓が、彼等の憑依を著しく統制していることに注目し、鼓手のたたくリズムは、丁度、被催眠者が、験者の誘導に従う様に、憑依者の行動に微妙な変化を与えるという。メトロ Metreux, A. も『ブードゥーのダンサーの熱中度とトランスを誘発する神経緊張は、鼓手のたたくリズムの巧みさとタッチの鋭さにかかっている。勝れた鼓手は、随意にトランスへ誘導し、又それを解除する。』と述べている。⁶⁾バウアズは、更に、次の様ないくつかの類似性をあげている。

巡査の笛が、あたかも解催眠刺激の様な効果を持ち、突然、鞭をならす様子は、手をはたく音の催眠誘導における驚愕効果に匹敵する。ブードゥーの信者達が示す非整合的動きは、ナイーブな被験者達が、『目を開いて動き廻りなさい』と暗示された時に行なう典型的な行動と一致する。ブードゥーの憑依行動も、良く条件づけされた被催眠者にも似て、ある信号 (前述の手の音や笛の音) によって全集団が止ったり動き出したりする。

バウアズのこの様な記述は、ある程度正常と考えな

ればならない憑依者達のトランスが、多くの催眠現象的な諸相を持つことを裏付けるに違いない。

第3 他の未開集団における憑依行動

筆者が便宜的に分けた三つの類似現象の記述が、相互にかなり重複するのはやもう得ない。これらの各現象は決して隔絶されるものでないから、引用する研究者達が心理学的解釈をする時、筆者ならずともこれらを類比させて示すことが多いからだ。

この第三のものは、既にいくつか提示したが、人類学者達の記載する事実を例示する限り、恐らく無数となってしまうだろう。しかし、シャーマンの憑依行動の心理学的解釈に利用するという意味では、今の所、大して大きな力を持たない。唯、前述したミシェルの論文等は、この分野での新しい試みとして特筆されるだろう（但し、彼等のトリニダット島における被験者は、民族学的な意味で未開集団に属していたわけでない）。今後、ミシェル達の行った様な研究が輩出する時、筆者の問題に大きな支援を与えてくれることは疑えない。

所で、間接的なことであるが、心理学的理論そのものに、種々の未開社会における憑依行動が役立っていることを見逃せない。手近な例だが、後述するサービンは、役割知覚が何よりも相互作用の場において形成されることを、ベネディクト Benedict, R. を引用して証立¹⁹⁾している。即ち、『トランス下で見る幻覚の内容は、集団内の成員では相対的に一定であり、集団相互間では著しく相違している。憑依者の役割は、彼自身の属する集団との相互作用によって受け入れられるのだ。』筆者は、一つの試案として、シャーマンの憑依行動に、彼の理論を当てて見るが、この事自体、間接的にブレイン・インディアンの憑依行動が、筆者の問題に役立っていることになる。又、異常行動が、文化的にどの程度規定されるか等という、基本的に重要な問題は、色々な未開集団に発生する憑依行動の、個別的研究、比較文化研究法による研究等²⁰⁾に負う所が大きいのである。

筆者は、シャーマンの憑依行動に類似した現象として上記三つを挙げ、これらの現象の研究が、シャーマンの憑依行動の発現過程を説明する為の前提である仮説の設定に重要な役割を演ずると述べた。即ち、これら現象、特に憑依症候群と催眠に関する心理学的解釈を、参照理論として仮説が立てられるのである。しかし、そこで問題となるのは、理論として、いかなるものを選ぶかである。心理学では、同一の現象に対して、各種の立場から解釈がなされているのが普通である。今、神経症に対するいくつかの理論を考えて見ても、精神分析学、ジャク

ソニズム、条件反射学、学習理論、実存分析等々とありしかも、それに「新」という様な接頭語がついたものや、著しい個人差が存在している。これらから何を選ぶかと言えば、選択者の心理学的立場に大半は依存するのであるが、より客観的な選択規準として、いかに矛盾なく解釈しているか、用いられている概念が客観的なデータを背景とするものか、シャーマンの憑依行動に良く妥当するか等を挙げる事が出来る。しかし、これら条件が完全に満たされていれば、大多数の者がその理論を取っている筈である。多岐に及ぶ立場の相違は、いづれも或る程度正しく、或る程度矛盾している為に外ならない。

もし、完全な理論が存在していたなら、憑依行動と、その精神病理学的症候群との偏差と、その偏差を生んだ原因を究明するだけで事足りる。が、現状では、ある理論の選択は、同時に、その理論の構成自体の検討をも含まざるを得ない。この際、特に憑依行動に妥当しない部分は、他の理論から、その部分だけうまく説明出来るものを折衷的に持ち込むことが、最も容易で有効な方法である。しかし、こうして構成された仮説全体が、自己懂著を孕だファウヌスやグリュプであってはならない。

ウォールマン Wolman, B. B. は、仮説形成に対する五つのルールを挙げている。即ち、

1) 内在的真理、2) テスト可能性、3) 儉約（古い仮説が反証された時にのみ新しい仮説を作り、出来るだけ単純な形であること）、4) 明瞭な表現。²¹⁾

筆者は、シャーマンの憑依行動に関する仮説に、少なくとも1と2、即ち、内在的真理とテスト可能性を要求しているのは言うまでもない。

注1 筆者は、シャーマンの憑依行動の類似現象として、他の宗教的な憑依行動（原始宗教を除いたもの）の記載をしなかつたのは、これらの研究の殆どが宗教病理学によつてなされて来た為、第1の憑依症候群の項に統合した。この分野での研究は、言うまでもなく Pinel, P. Esquirol, J.D. Calmeil, L. 等に始まり、現代の Lhermitte J. によつて代表されるフランス宗教病理学において圧倒的に多い (cf. 19, 23)。

第2章 一試案としての役割理論の応用

前章の終りで、憑依行動を解釈する上で要請される類似現象の心理学的理論が、出来るだけ客観的な検証を経て構成されたもので、しかもその理論自体に内的矛盾のないものである限り利用されると述べた。しかし、こうした理論を一つだけ取り出そうとする時は、なかば各自

の立場によって左右され、客観的な評価は極めて困難である。筆者が、全く試論的な形でこの章で引用するサービンの催眠理論も、その意味では、主観的な好みによって選ばれたものである。現今、役割概念が社会学や社会心理学で広く受入られている様に、このサービンの理論も、かなり有力な催眠理論として用いられている。しかし、言うまでもないことだが、これが完成されたものでない以上、多くの反論も提出されている。特に役割といった社会学的な構成概念、いわば最も団塊的molarな概念で、各種の病理的な徴候を伴った催眠現象をすべて解釈してしまうことを訝るむきが多い。成瀬氏も、この理論を評して、催眠における意識性変化、無意識化、分離などの現象についての説明の不備をあげ、更に『役割設定(role-enactment)によって生理的变化が起る由来を一応説明しているが、やゝ牽強附会の感をまぬかれない』と述べている。

この様な缺陷はまぬがれないが、役割概念自体も、次第に実験的検証に堪えうる概念として整備されつつあり、又、他の病的な現象にも応用され、出来るだけ多くの問題に答えうるという心理学理論の一つの理想に近づくようとしている様だ。

筆者は、シャーマンの憑依行動の心理学的仮説の定立に先立つ一つの手がかりとして、サービンの催眠理論が整理を与えてくれると考える。ここで憑依行動を説明しえない部分は、エクストラクティブに転用される他の心理学的法則が、次第に間隙をうづめて行き、一貫した、しかも客観的手続きによる検討を加えられる『仮説』として定立されるのである。

さて、サービンのこの理論は1950年のPsychological Review に発表されたもので、『役割取得理論への寄与』と題する一連の研究の一つである。彼は、当時における各種の催眠理論を概観し、中でも、ジャネ Janet, P. の完全な分離現象としての催眠観を、『今さら持ち出してとやかく論ずることは、死馬に鞭打つ様なものだ』と言って排斥してしまった。事実、催眠行動を、他の社会心理学的事象と連続する次元で考えられる場合、この完全な意識・無意識層の分離現象とする見解は、否定されなければならない。彼は、更に現代の催眠理論の殆どが目的論的性格を持つとし、ホワイト White, R. M. の『催眠は意味ある目的を追求する努力である meaningful goal-directed striving』という定義を発展させて行った。

サービンは、仮説として、『被催眠者としての役割の実現(role-enactment)は、役割と自我の適合性、役割知覚の正確さ、役割取得適性の函数である』¹⁴⁾ということを提出し、この検証を進めて行くのである。

1) 被催眠者は良く動機づけられていること

彼は、催眠を、催眠者から被催眠者への一方的な働きかけと看做す考えに反対し、被験者側の自発性による行動の側面を強調する。彼の引用したホワイトの論文にまつまでもなく、催眠場面が、験者と被験者の所謂対人関係の場であるのだから、被験者自身の動機や誘因を無視して、催眠行動を誘導手続きに全く依存する自動運動と考えることは出来ない(cf・8)。唯、サービンに特徴的なことは、この催眠行動の動機づけの問題を、役割取得理論によって解決しようとした点である。即ち、被催眠者の自我知覚と(被催眠者という)役割知覚が一致している場合、催眠に良く動機づけられるという。

この仮説を立証する為、一つの実験を示した。それは第一実験で、高い被催眠性(催眠感応度:サービンは両者をあまり区別していない)を示した被験者(この実験において、露出症的慾求の優勢な自我知覚と、被催眠者の役割知覚が一致していた)が、第二実験までに自我知覚が変更された為、催眠に対して著しい抵抗を示すという実験である。

我々は、シャーマンの憑依行動に対して、憑依霊が侵入するという信仰を持たぬ限り、彼等のトランスへの没入が、その動機づけと密接な関係があることを見逃すべきでない。特に、憑依行動が自己催眠の様相が強いから、シャーマンの自我知覚とシャーマンという役割の知覚が一致することが、トランスに入る上で非常に比重が高いだろう。

2) 役割知覚が正確であること

彼が、催眠行動を役割実現と看做す以上、それが役割知覚という生活体内反応と、密接な関連があると強調するのは当然である。この役割知覚とは、彼の他の論文で明示された様に、¹⁴⁾役割期待が、一種の認知的図式の様な作用をして発現する反応である。

今催眠状態に入れられ様とする被験者は、既に各種のコミュニケーションを通じて、様々な役割を獲得しており、その中に、大抵被催眠者の役割も含まれているのである。この様な被験者に、験者が実験の布告をし、催眠誘導の手続きをほどこす時、それが被催眠者という役割の知覚を誘発する刺激となる。知覚は、それに続く顕在的な反応の先行条件である。従って、彼が役割知覚という用語を使用する以上、後続する運動的な役割実現に明らかに影響を及ぼすのである。

彼は「被催眠者の役割知覚」と催眠行動という役割実現の関係を示すいくつかの明証を示した。彼自身の実験では、験者が催眠について何ら教示しなかった被験者の自発的行動が、彼等に一週間前に書かせた催眠について

の所見と著しく一致している(cf・13)。

シャーマンの憑依下で行なう諸種の行動は、幼児から聞かされている伝承や、修業中に老シャーマンから伝授された秘伝に現れる精霊、或は、より一般的に言ってシャーマンはかく振舞うべきと期待され、期待している振舞を演じていると考えられる。即ち、シャーマンが相互作用の中で獲得した役割の知覚は、憑依行動という役割行動に反映される。

3) 役割取得適性が必要である

サービン¹²⁾は、催眠行動の説明に、動機因子と役割という二変数だけで不十分なため、第三の変数として役割を演じる為の適性を持ち込んだ。

被催眠性や催眠感応度が被験者のいかなるパーソナリティ特性と関連するかという問題は、なかなか確証を得にくいことである。かなり古い論文であるが、ヤング Young, P. C. の、催眠を実験的に取り扱った諸論文のレビューにおいても、性格テストで得られた諸特性が、テストの種類や実験者の差によってひどくまちまちであることが示されている。²⁴⁾この様に、既存の雑多なパーソナリティ特性の羅列から、被催眠性(催眠感応度)に相關する因子を抽出することの困難さがあるので、サービンも、マドウ Madow, L. と共同して行った実験で、催眠される者と催眠されない者とのロールジャッハ得点に有意の差を見出せなかった。唯、ロールジャッハ因子を組み合わせて見ると、W/D(全体反応と部分反応の比)が・40以上である時、¹²⁾両群を分けるに足る有意性を持つ事を発見した。彼はそこで、全体反応が、抽象的思考形式を反映する所から、催眠感応度は、より積極的な想像能力に相關すると論ずるのである。この想像力とは、彼の役割理論において、いかにうまく役割を取得するかということに関連する。即ち、役割という概念の語源であるドラマの役割が熟演されるほどに、役者が役と自我との境界を見失いながら、「あたかも自分がハムレットであるかのごとくになってし」まう。この様に、ある役割を取得する場合、自我との接近性(意識可能性) accessibility が失なはれるのは、彼の想像力、即ち、かのごとき公式を使用する能力と相關するのである。役割実現でこの「as-if formula」の使用が徹底すればする程、生活体の関与が増大する。

こうして、生活体の関与の程度に応じて、日常行動から、タブーを犯しただけで死んでしまう未開人の行動にまで及ぶ、七層の役割実現の段階を提示したのである(cf・13, 14)。

彼とルイス Lewis, J. H. の行った催眠実験で、食物摂取暗示と胃収縮の制止が、催眠の深さと高い相関を示す

結果を得た。⁵⁾このことから as-if formula によって、深い催眠に入る被験者程、あたかも食物を摂取したかのごとく行動することが(想像過程)、催眠されない者や浅い催眠者より、うまく出来、従って、胃収縮という様な生理学的変化は、想像力(かのごとき公式を使用する能力)に相關するというのである。

筆者は、昨年、明瞭なトランスに入り、顕著な憑依行動を示す二名のシャーマンにロールジャッハテストを行った。実験状況の不備もあり、客観性に全面的な信頼を置けないが、結果はサービンの・40という標準をはるかに上まわるものであった。臨床的な面接でも彼等はいたって空想力に富んでいる。従って、彼等の役割取得適性は非常に高いと言える。

筆者は、上述の様に、サービンの催眠理論を概観し、そこで提示された催眠行動を発現させる時に関連する三変数が、シャーマンの憑依行動において相關関係を持つことを予想した。

サービンによると、役割とは『相互作用状況における個人によって遂行される学習された行為、または所為 deed の、類型化された連続』であり、¹⁴⁾勿論、これは、社会構造の単位である位置を、更に組織しているものと看做することが出来る。シャーマンが、儀式状況においてシャーマンという位置に付帯した役割を、いかなるものとして知覚するかを問題とする時、筆者が、第一の焦点としてあげた研究で、操作的に得られた各因子が密接に関連して来るのである。この各因子は、彼に既に獲得されている権利と義務の体系、即ち、役割期待の中に組織されている。この役割期待という組織的文脈から、儀式場面における何らかの刺激によってシャーマンの役割と統括的に呼びうる役割の知覚が生ずるのである。この時知覚されている役割は、単に、シャーマニズムを構成している因子のみから成り立つものでないことは言うまでもない。

又、役割理論における一方の極である自我においても、筆者がシャーマニズムを構成させる諸因子が、属性として含まれている。一般に、役割理論は、パーソンズ・シルズが『社会的客体は性能の複合とみなされる』¹⁰⁾といった相で、自我を考える。彼等において性能は属性に等しい。シャーマンの儀式場面で、彼(女)が自我として知覚するその諸属性の内には、やはりシャーマニズム因子が包含されているのである。

この二者、即ち、シャーマンの儀式場面においてシャーマンの内部に生ずる役割知覚と自我知覚が渾然と一体となる時、彼等はトランスへ動機づけられ、その役割知覚にあるがまゝの憑依行動を示す。又、随伴する種々の

生理学的変化は、シャーマンの想像力の豊かさに示される as-if 公式を利用する顕著な能力によって、必然的に発生して来るわけである。

筆者は、人間行動のメカニズムを説明する時、避ける事の出来ない認知的要因を、粗大ではあるが、役割と自我の分節で論ずるサービンの見解にかなり賛同の意を表するものである。しかし、ヴァイヒンガー-Vaihinger, H. を背景とする as-if 公式によって、生理的变化が決定されるということには首肯出来ない。勿論、心理的過程と生理的過程は、平行するものであるから、想像力が憑依行動に伴う各種の生理的变化に影響するのは事実である。しかし、それは、その変化を完全に決定しているわけではないのだ。シャーマンの儀式場面における、ある種の外的刺激が、シャーマンの憑依行動に異様な諸変化をひき起す原因となっていることも見逃すことが出来ない。この弱点に対しては、かなりモレキュラーな水準での心理学理論の転用が要請されるのである。

参 考 文 献

1. Benedict, R. Anthropology and the abnormal. J. gen. psychol. 1934, 10.
2. Bowers, M. Hypnotic aspects of Haitian Voodoo. Int. j. clin. exp. hypnosis. 1961. 10.
3. Eysenck, H. J. Dimensions of personality. London. 1947.
4. Findeisen, H. Schamanentum. Stuttgart. 1957.
5. Lewis, J. H. & Sarbin, T. R. Studies in psychosomatic : the influence of hypnotic stimulation on gastric hunger contradictions. Psychosom. med. 1943. 5.
6. Metreaux, A. Voodoo in Haiti. New York. 1959.
7. Mischel, W. & Mischel, F. Psychological aspects of spirit possession. Amer. anthrop. 1958.
8. 成瀬悟策, 催眠, 東京, 1960.
9. Ohlmarks, A. Studien zum Problem des Schamanismus. Lund u. Kopenhagen. 1939.
10. パーソンス, T. シルス, E. A. (永井道雄, 作田啓一, 橋本真訳), 行為の総合理論をめざして, 東京, 1960.
11. Poincaré, H. La science et hypothèse. Flammarion 1903.
12. Sarbin, T. R. & Madow, L. Predicting the depth of hypnosis by means of the Rorschach Test. Amer. j. orthopsychiat. 1942. 12.
13. Sarbin, T. R. Contributions to role-taking theory: I. Hypnotic behavior. Psychol. rev. 1950. 57.
14. サービン, T. R. 役割 (ロール) の理論, 社会心理学講座, I. (リンゼイ, G. 篇) 東京, 1956.
15. Schilder, p. Medical Psychology. New York. 1953.
16. Sears, R. R. & Cohen, L. H. Histerical anaesthesia, analgesia and asteriognosis. Behavior therapy and the neurosis (ed. by Eysenck, H. J.) 1960.
17. Stoll, O. Suggestion und Hypnotismus in der Völkerpsychologie. Leipzig. 1904.
18. Tolman, E. C. A theoretical analysis of the relations between sociology and psychology J. abn. soc. psychol. 1952. 47.
19. 和田完, シャーマンの憑依行動(1), 北方文化研究報告, 1962. 17.
20. White, R. M. A preface to the theory of hypnotism. J. abn. soc. psychol. 1941. 36.
21. Wolman, B. B. Cntemporary theories and systems in psychology. New York. 1960.
22. Woodworth, R. S. Dynamics of behavior. London. 1958.
23. Yap, P. M. The possession syndrome, J. men. sci. 1960.
24. Young, P. C. Experimental hypnotism; A review. Psychol. bull. 1941. 36.